

「One child, one teacher, one pen and one book can change the world. Education First.」
これは、パキスタンのマララ・ユスフザイさんの2013年7月12日国連本部スピーチです。
彼女は女性や子どもの権利を訴え武装勢力の銃撃を受け重傷を負いましたが、教育の必要性を訴え続け2014年10月に最年少（17）でノーベル平和賞を受賞しました。

日本で暮らす私たちには、読みたい本を選べる自由とそれを容易に手に入れられる環境があります。何より、誰もが本を読むうえで必要な教育を受けることができます。その自由と環境、権利を当たり前を受けている者として姿勢を正したくなる言葉でした。

記憶をたどると、20代、30代は井上靖、遠藤周作、杉本苑子など、人間の強さや弱さ、生きる希望や信念などを題材にした時代小説を好んで読んでいました。遠い古にロマンを膨らませて過ごす時間は楽しく、ささやかながら人生を豊かにしてくれていたように思います。特に、奈良・鎌倉・戦国時代を背景にたくましく生き抜いた女性の生涯を描いた小説も多く、彼女たちの価値観や生き方には時代を超えて共感できるものがありました。その時々心に響くものとして関心を持った本の変遷は同時に自身の感性や価値観の変遷を映し出しているようでもあります。

最近看護に関連する翻訳本を読むことも多いのですが、できるだけ原書を読むのが良いと言われていて。というのも原書を原語で読むにはその思想や価値観などの理解も求められるので、例えばミルトン・メイヤロフの著書「ケアの本質」のような生きることの意味を読み解くには原書で読むのが良いことは納得できます。言うは簡単ですが…。

本は、様々な価値観に触れて自身の価値観を強化あるいは再構成して自分とは異なるものも尊重する心を育ててくれるものだと思います。マララさんは、教育者である父親が弟と同様に教育を受けさせ彼女の「翼」を切り取らなかったことを感謝していました。女性の権利が否定される社会のあり方に疑問を持ち自ら声を上げて行動したマララさん、あなたはどんな本を読んでいたのかしら？

【心に残る本】

- ① 『星の王子さま』サン＝テグジュペリ作 内藤濯訳 岩波書店 2000.3 他多数
- ② 『100万回生きたねこ』佐野洋子作・絵 講談社 1977.10
- ③ 『敦煌』井上靖著 講談社 1985.8 など
- ④ 『沈黙』遠藤周作著 新潮社 1988.3 など
- ⑤ 『孤愁の岸』(杉本苑子全集 第1巻) 杉本苑子著 中央公論新社 1997.3
- ⑥ 『ケアの本質：生きることの意味』

ミルトン・メイヤロフ著；田村真，向野宣之訳 ゆみる出版 1987.4

※②⑥は当館に所蔵しております。(②726.6:Sa66 ⑥114:Ta82)